

今日の黙想のてびき

週日聖書日課 列王記下 4：18～37
2026年4月8日(水)

◆文脈

- 列王記（上下）は、イスラエルの黄金期を築いたソロモン王の即位から、国が南北に分裂し、最終的に南ユダ王国が滅亡してバビロン捕囚となるまでの約400年間の歴史を記した書物です。しかし、単なる事実の列挙ではなく、なぜ、神の民である自分たちが国を失い、捕囚の身となったのか、というイスラエルの民の問いに答えることにあります。そのため、王たちの評価基準は「政治的・軍事的な成功」ではなく、「主の目に正しかったかどうか」という一点で語られます。
- 王たちが神との契約を破り、不忠実に陥る中で、神は預言者を遣わし、言葉を与え、奇跡を通してご自身の生きた支配を示し続けました。エリシャはエリヤの後継者で、裁きよりも、人々の欠乏や死に寄り添い、神の慈しみと命の回復を実現するような働きをしました。

◆あらすじと説き明かし

- シュネムでエリシャをもてなした女性に、神から恵みとして子供が与えられます。けれどもその子は急死してしまいます。その時、女性はエリシャを訪ねることを決心します。「神が始めたことだから、神が責任を持ってください」という信頼を伴う嘆きをぶつけるためと言っていいでしょう。
- 女性は、苦しい思いの中エリシャの足にすがりつき(27節)、しかし、エリシャを責めます(28節)。また、主も預言者も生きておられるから離れませんか信頼を告白します。
- エリシャはまず、自分の杖をゲハジに持たせて送りますが、奇跡は起きませんでした。杖という「道具」や「形式」では、死の冷たさを打ち破ることはできなかつたのです。そこで、追いついたエリシャは部屋に入り、主に祈り、死んだ少年の上に自らの体を重ねます。すると少年は生き返りました。
- わたしたちは嘆きの詩編から、神へ現状と思いをぶつけて嘆くことを学びます。信頼しつつも苦しいのです。本箇所は、嘆きの祈りが行動によって示された出来事と言ってもよいでしょう。
- そして神は、この女性の嘆きを聞き入れ、エリシャによって子供を生き返らせます。神は命を回復なさる方なのです。
- 少年と完全に体を重ねて命を回復する姿は、わたしたち人間と全く同じになって同じ所まできてくださって自らを投げ出し命を与えてくださったイエス・キリストの姿を思い浮かべます。
- 新しい命を神から与えられた者は、この女性のようにひれ伏して命の神を礼拝します。